

「ラーニングライフ 第6回学生の学修に関する実態調査報告書」の結果に基づく対応計画

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等
	事項(問題点・優れた点等)	対応計画等	
総合科学部	1	「大学教員と顔見知りになる」「他の学生との友情を深める」ことが難しいと感じている新入生が多い。 (1) 大人数が参加する新入生オリエンテーションなどは、感染症対策のため遠隔で実施せざるを得ないが、単に資料を掲載するオンデマンド型ではなくライブアーカイブ型にして、双方向性を持たせ、教員の雰囲気やわかるようにする。授業においてもグループ学習の導入などの要素を取り入れることとする。 (2) コロナウイルス感染状況の終熄に合わせて、少人数の授業より対面授業に転換していくことを教員に要請する。	令和3年度の新入生オリエンテーションから、単に資料を掲載するオンデマンド型ではなくライブアーカイブ型にして、双方向性を持たせることに成功した。オリエンテーションの一端としてオンライン学生交流会を開催し、「友達をつくる」・「教員と顔見知りになる」機会を授業開始前に設けることができた。令和4年度に向けて、さらに発展した新入生オリエンテーションを計画している。 新型コロナウイルスの終熄を待っている。
	2	英語力の向上が学年を経るごとに緩やかになる。コースによって学年を経るごとに英語学習の機会が減少する。 (1) 継続した学びを促す学習指導を行う。(例:総合科学部専門教育科目として開講されている英語系科目を体系化し、国際教養コース以外の学生も英語学習のイメージを持ちやすくする) (2) オリエンテーションやコースガイダンスで、コースに関係なく参加できる英語学習の機会があることを周知する。(例:語学マイレージ・プログラムの対象となる語学教育センターが実施するプログラムや高等教育センターが実施するプログラム、スーパー英語など)	英語系科目担当教員と検討を行っている。 令和4年度の新入生オリエンテーションにて周知を計画している。また、各コースのガイダンスでの周知について、各コースに検討を依頼している。
医学部医学科	1	1年生では体験的に学ぶ機会や学生自身が文献や資料を調べる機会が少なく、一方、予習・復習時間は1年生よりも3年生の方が少なくなっており、低学年においてアクティブラーニングが定着していない。また、1年生、3年生では、日常的に自身の学修内容等を振り返り、改善点を見出し、向上を図っている学生が半分を満たさず、省察が十分に習慣づけられていない。 (1) 対面授業ならびにオンライン授業ともに体験型および双方向の手法を取り入れることを推進する。また、それと並行して、1年生のSIH道場に始まり、各学年で年間を通じて省察の機会を繰り返し設けていく。 (2) 2年次のカリキュラムを中心に、過密の改善、水平統合・垂直統合の促進、アクティブラーニング推進に取り組む。	「情報科学入門」「私、その存在と未来」「生理学入門M」はすべて反転授業を実施している。指定書物や動画について予習させ、授業当日は、スモールグループディスカッションをさせ、知識の確認や補充などに充てている。予習時にポートフォリオの作成を推奨し、各授業後の振り返りも記載するよう指示している。担当教員が一人であり、スモールグループディスカッションやポートフォリオの内容のチェックができておらず、その点が次の課題である。 解剖学と生理学が連携をとり、臓器別に授業内容がそろそろよう調整をはかるとともに、解剖生理学として内容を整理し、授業の効率化を進め、授業数の削減に努めている。今後、生化学や薬理学などとの連携も進めていく予定である。生理学は、反転授業化を進め、本誌試験のみという体制から、臓器別の形成的試験へと移行している。 生理学、生化学、薬理学の実習の統合化を進め、効率化をはかるとともに、3年次の医学研究実習の準備教育として、問題発見解決力の育みにも力点を置いている。
	2	1～3年生の期間に、異文化の人々と協力する能力、地域社会が直面する問題を理解する能力、コミュニケーション能力の向上が不十分である。また、専門性と関連したスピーキングやライティング等の英語教育が不十分と感じている学生が多い。 (1) 1年生での早期臨床体験実習や3年次の社会医学実習において地域での学習機会を増やすとともに、専門職連携教育を取り入れていく。 (2) 国際性を身に着けるという観点から、教養教育英語科目から専門科目にいたる体系的なグローバル教育カリキュラムの整備を行う。	3年次の社会医学実習において地域医療機関や老健施設等を新たな実習施設として追加した。1年次については、COVID-19流行のため早期臨床体験実習に地域での学習機会を設けることは実現できていないが、Zoomを用いたオンライン方式で、医学部、歯学部、薬学部の1年次全員を対象としたグループワークを実施した(チーム医療入門ワークショップ、9月30日実施)。 教養教育英語科目では2名のネイティブ教員によるスモールグループディスカッションを中心としたアクティブラーニングを展開している。さらに、自ら学修課題を設定し自学と振り返りを英語で実践する授業(Self-Study Zone)をトライアル実施し、クラスの3分の1が最後まで参加できたため、方法をより改善し単位化を目指す。また、2～3年次基礎医学科目でのterminology、3年次医学研究実習でのreading&writingの教育と評価、4年次医学英語でのオンラインロールプレイを実施した。
	3	3年生の多くが自分の専門分野について興味関心を持ち、意欲的に取り組んでいると回答している一方で、大学教員の学問的な期待を理解できないと感じている学生が約3割存在し、大学院への進学希望が3年生では3%と激減していることから、専門医としての将来像における研究の意義・重要性が十分に理解されていないと考えられる。 (1) 学生が医学研究に関心を持ち、主体的に取り組むために、基礎医学と臨床医学の垂直統合カリキュラムを構築するとともに、スチューデントラボや医学研究実習における学生の研究参加を促進する。 (2) 医師としての将来像における医学研究の重要性についての理解を促進するために、クラス担任制度の中でキャリア形成支援を行う。	形態・機能・病態系、分子生物学系、感染症・感染制御系、社会医学・地域医療学系、プロフェッショナルズ・倫理・医療法学系、行動科学系について、関連する科目の責任教員等によるワーキンググループを設置し、コースコーディネーターが中心となって水平・垂直連携の協議を開始した。教務委員会の下にスチューデントラボ部会を新たに設置し、教務委員や若手教員がメンバーとなり、低学年からの研究活動促進に取り組んでいる。 今年度から、学生がフレ配属の際に最初に立てた「目標設定シート」に基づいて、医学研究実習の最後に指導教員あるいは責任教授と面談を行い、振り返りと評価(フィードバック)を行うことを必須とした。
	4	クラス担任制度については、1、2年生を基礎系教員、3年生を研究室配属先教員が担当しているが、満足と答えている学生は、1年生および3年生ともに約1/3にとどまっており、教員によって学生との対応や交流の頻度が異なる等、学生のニーズや希望を十分に汲み上げられていない。 (1) メンタリング・面談の時期や回数を医学科として規定し、すべての学生に対して定期的に実施する。 (2) 満足度が非常に高い4年次のメンター制度と同様に、面談においては、振り返りや将来のキャリア形成もテーマとして取り入れる。	令和4年から、3年次医学研究実習における中間ヒアリングの際に、基礎系教員が中心となって、キャリア形成を含めたメンタリング・面談を実施する方針とした。 令和4年から実施予定の3年次医学研究実習中間ヒアリングでの基礎系教員によるメンタリング・面談では、キャリア形成についてもテーマとする方針とした。
医学部医科栄養	1	英語の学習状況で、1年次に比較し3年次では自己評価が大きく低下している。専門課程での英語の授業を増やしてほしいとする者が多い。 (1) 令和2年度入学生より専門課程での「栄養英語」を必修化しており、今後の推移を見ている。	「栄養英語」は2年次での開講となるので、令和2年度入学生は令和3年度に全員受講した。学生の評価については来年度のラーニングライフ調査で評価を行うこととした。
	2	カリキュラムマップやナンバリングについて「知っており、見たことがある」の割合が極めて低い。 (1) 1年次より3年次で低下していることから、1～3年次の4月のオリエンテーション時にカリキュラムマップとナンバリングについて説明する。	令和4年4月に実施予定の1～3年次のオリエンテーションにおいてカリキュラムマップとナンバリングについても説明する予定とした。
医学部保健学科	1	授業内容の難易度が適切と答えた3年次学生は、看護学専攻80%、放射線技術科学専攻89%、検査技術科学専攻78%であり、看護学専攻と放射線技術科学専攻は全学の77%より高い傾向にある。検査技術科学専攻においては、授業内容の水準をもっと高度にすべきと答えた学生が17%と割合が高く、前回調査から変化がみられた。個別的面談等を通して状況を把握する必要がある。一方、放射線技術科学専攻では、水準をもっと易くすべき、と回答した学生の割合が、前回調査の14%から6%に減少すると共に、授業内容が理解できる科目の割合が60%未満と回答した学生数も前回調査の14%から3%に減少した。授業内容を理解できる科目の割合が80%以上の学生は1年次の各専攻で約20～30%であるが、3年次では看護学専攻は約2倍、放射線技術科学専攻は3分の1で、検査技術科学専攻は変化がない。 (1) 難易度に関して特に問題は無いと考えられるが、詳細な分析が求められる。	数年間の調査結果に基づき、教育プログラム評価委員会と教務委員会を中心に、分析と結果の検討を行うこととした。
	2	「将来の見通しを持ち、何をすべきかわかっている」と答えた1年次学生は7割で、全学の5割と比べて割合が高い特徴を持つ。さらに、将来の仕事と授業内容の結びつきに対して「とても満足」「満足」と答えた各専攻学生の割合は、1年生で約7～8割、3年生で約8～9割と全学平均の約5～6割と比べて比較的高い。さらに今回の調査結果は、前回より1割程度高い特徴がある。 (1) 幅広い学修の促進を目的として、専門性を志向した学修方法を入学直後に提示し、将来像をイメージした「学修設計」の立案を指導している。学修計画に沿った学修ができるよう継続的に指導と支援を行っており、取り組みの浸透結果が現れている。引き続き、取り組みを推進する。	冊子「学修の手引」を最新の内容に改定する作業を実施し、継続して、幅広い学修の促進に係る取り組みを推進する。

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等	
3	授業内容の理解促進につながった授業方法として「課題演習」「振り返り」を挙げた学生が多い。看護学専攻では積極的に「グループワーク」が高い割合になっている。	(1) アクティブ型授業を導入することで理解度を高める効果があることを明確に示している。能動的な学修の推進を図る。	引き続き、能動的な学修の推進を図る。
	授業時間外において、授業課題や準備学習・復習を6時間以上実施したのは、1年生では34～44%、3年生では28～37%。授業に関連しない勉強を1時間以上行ったのは、1年生では20～44%、3年生では43～56%に留まっている。大学生としての必要な学習時間の確保はまだ不十分であるが、コロナ禍で在宅時間が長くなったためか前回よりも学習時間が増加していた。一方で、現在の自分の学修時間や学修態度に満足していない学生の割合は、1年生で28～55%、3年生で17～31%ある。また、シラバスを毎週または気になったときに確認している3年次学生は5～6割のみであり、ほとんどまたは全く見ていない学生が多い。	(1) 学修意欲を高める適切な指導により自発的な学修が可能と読み取れる。毎回の授業の予習・復習や自学自習の指示などをシラバスに明示して、教育改善に活用する工夫が求められる。	毎回の授業の予習・復習や自学自習の具体的な指示などをシラバスに記載すること。翌年度の初回の授業で授業時間外の学修について説明することをシラバスの作成作業期間に授業担当教員に伝え、確実な実施を促した。
	英語の学修では、大学で実施している英語教育で十分であると考えている保健学科学者が多い傾向にあるが、検査技術科学専攻では、専門英語の時間を増やしてほしいとの意見がある。	(1) 語学マイレージプログラムの導入による効果もあり、英語学習を習慣付けたり、スーパー英語などのeラーニングサービスを利用している学生が以前よりは増えているが、英語学習方法の周知や学習相談を促す対応も必要であろう。	各学年の新年度オリエンテーションにおいて、英語学習方法や学習相談体制の周知を行う計画である。
1	授業において、自分の考えや研究を発表したり、学生同士が議論をするなどの機会が増えており、アクティブラーニングの導入効果が出ていると思われる。	(1) 学生の議論や発表の機会を設けるなど、アクティブラーニングの推進は図られているため、講義時に小テストを設ける、準備学習・復習が必要な課題を与えるなど自学の機会を増やす。	小テストや準備学習・復習などの自習の機会を増やした。今後このような機会を継続していく。
		(2) 年2回開催される四国歯学会（徳島大学歯学部主催）での学生の研究発表の機会があるが、さらに発表演題数を増やし、学生の発表機会を増やす。	第59回四国歯学会では学生グループから6演題の登録があり、研究発表の機会が設けられている。今後も継続していく。
	新型コロナウイルス感染により、対面授業より遠隔授業が多く、自宅での課題などが増えたためか、自習の機会が増えた。大学に来れない日があったためか、教員とのコミュニケーションの機会や他の人とのコミュニケーションの機会が減っている。	(1) 感染対策をとりながら、人とコミュニケーションがとれる機会を増やしていく必要がある。さらに、孤独にならないためにも、担任やメンターとの面談など、教員の学生に対する生活・学習のバックアップ体制を整える。	次年度は生活・学習のバックアップ体制を整えるために現在設置している各学年の担任に加え、副担任も設置予定である。
		(2) 歯学部は、歯学英語や外国人留学生を支援する国際口腔保健推進学分野があり、外国人教員が在籍しているため、学生の外国人留学生との交流を通じて外国の言語・文化・風習（慣習）・医療体制などを学ぶ機会をさらに増やす。	国際口腔保健推進学分野を中心に、新型コロナウイルス感染症拡大状況に応じて、国際交流の機会を増やしていきたい。
	3年生対象 問 [19] クラス人数が少ない口腔保健学科ではグループワークが効果的との評価を得ている。	(1) 口腔保健学科でのグループワークを継続して実施する。	今年度は継続して実施した。来年度以降も継続して実施していく。
		(2) クラス人数の多い歯学科で効果的にグループワークを行う方策について検討する。	科目によってはグループワークを取り入れ、実施している。
2	3年生対象 問 [30]、[31]、[37] 口腔保健学科では授業外での学習機会の確保、学習相談、支援への需要が少ない。	(1) 需要が少ない原因が、普段の授業の充実によるものか、学生の消極性にあるのか調査し、消極性にある原因があれば、積極的に活用するよう指導する。	今年度歯学部では学生の自習室が新規に2つ設置され、学生が自主学習できる環境を準備した。
	3年生対象 問 [42] から [45] 口腔保健学科では知識や対応能力の自己評価が高いが、相対的に批判能力の自己評価が低い。	(1) アクティブラーニングを充実させても批判的視点の涵養に及んでいないのかを検証し、必要に応じてアクティブラーニングの内容に反映させる。	時間数が多い科目についてはアクティブラーニングを積極的に取り入れている。批判的視点の自己評価が低いアンケート結果の改善に反映されているかは今後の報告結果を参考にしていきたい。
	3年生対象 問 [64] 歯学科ではGPAを確認している学生が少ない	(1) より良いGPAを獲得する動機づけを行う。	4月の学部オリエンテーションの際に周知する予定である。
	第5回実態調査において、1年次、3年次、また学科に関わらず、他学部と比較して優れた点であった「授業内容と社会や日常生活のかかわりについて、教員が説明する」、「授業中に学生同士が議論する」、「授業で検討するテーマを学生が設定する」機会が頻繁と回答している学生の割合が激減した。一方で「定期的な小テストやレポートが課される」機会が頻繁であったと回答している学生の割合が顕著に増加した。	(1) 新型コロナウイルス感染症の影響による対面講義の減少による影響と考えられるが、学年に関わらず非対面講義であっても可能な限り「授業内容と社会や日常生活のかかわりについて、教員が説明する」機会を増やし、当該授業科目への興味を引き出したり、理解を深めるための工夫を行っている。また、学生の状況把握のため、定期的なクラス担任ごとにクラス会を開催し、機会を設けている。	講義において、非対面講義であっても可能な限り「授業内容と社会や日常生活のかかわりについて、教員が説明する」機会を増やし、当該授業科目への興味を引き出したり、理解を深めるための工夫を行っている。また、学生の状況把握のため、定期的なクラス担任ごとにクラス会を開催し、機会を設けている。
		(2) 新型コロナウイルス感染症の影響による対面講義の減少による影響と考えられるが、学年に関わらず非対面講義であっても可能な限り学生参加型の講義となるよう努める。	講義において、非対面講義であっても可能な限り学生参加型の講義となるよう努めている。
	創製薬科学科1年次生において「授業以外の学修時間」が5時間以上の割合が大きかった。	(1) 「定期的な小テストやレポートが課される」機会が頻繁にあったり、『研究体験演習Ⅰ』や『学術論文作成法』などグループワーク中心の講義が開講されている影響と考えられる。今後も授業以外の自主的な学修時間が増加するよう、授業に関する予習・復習を促すよう努める。	授業以外の自主的な学修時間が増加するよう、授業に関する予習・復習を促すよう努めている。
3	両学科の約2～3割がLMS（リメディアル教材）の存在を知らずなにもしていない。	(1) 高校で履修していない科目に係る入学後の勉強方法について、入学時のオリエンテーションなどで周知し、活用するように促す。	R4年度入学時のオリエンテーションで周知し、活用するように促す予定である。
	「教養教育、専門教育で行われる英語教育で十分である」と回答する学生が最も低く、創製薬科学科3年次で2割を切るころまで減少している。	(1) 薬学英語1、2の内容の充実を図る。また、創製薬科学科は3年次前期から、薬学科は3年次後期から、卒業研究のため研究室に配属されることから、研究室での専門的な英語教育を実施するなどして、学修の機会を増やす。	創製薬科学科においては、卒業研究発表会を英語で開催することとし、研究室配属後の英語力の向上を促せるよう英語学修のモチベーションを高めた。
	「現在の自分の学修時間や学習態度に満足しているか」と答えた学生が低い水準にとどまっている。	(1) 新型コロナウイルス感染症の影響による対面講義の減少や生活リズムの変化による影響を大きく受けたものと考えられる。本年度1年次よりカリキュラムを変更しており、上記講義の工夫とあわせ、学生のモチベーションの変化を注視したい。	コロナ禍の影響が大きかったものと考えており、新たなカリキュラムに沿った講義の工夫とあわせ、学生のモチベーションの変化を注視している。
	理工学部ではアドバイザー制度や担任制度により学生の学修をサポートする取り組みを行っています。1年生に比べ3年生の方が相談等増えているものの、学生は必ずしも教員を身近に感じてはいないようです（設問32、33、37、82、94、114）	(1) コロナ禍により接触機会は減っていますが、一層コミュニケーションを深められるように努力します。また、コースによっても低いながらもラフキと質問の相関関係が見えないところもあります。それらを再検討し、全体のペースアップを図ります。なお、アドバイザー制度は最近導入されたもので良否は判断するには早いのですが、担任制に比べて一人の教員が少ない人数の学生を受け持つため、相談しやすい環境が作れると考えています。引き続き、担任制、アドバイザー制度を並行して実施していきます。	クラス担任制、アドバイザー制度を着実に実施し、定期的に学生との面談をしています。定期的にコースで行っているガイダンスの際に、クラス担任制、アドバイザー制度を周知していきます。

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等	
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等		
理工学部	2	昨年度はコロナ禍のため、強制的に多くの授業がオンラインになっていました。e-learningに関する調査（設問122-124(1年生)・設問125-127(3年生)）において、「本学のe-learningサービスが学修に役立つか」という問いにはおよそ半数が肯定的な意見でした。しかし、増やすかとの問いに関して否定的な意見が散見され、その傾向は3年生の方が顕著です。今後ともオンライン授業は増えると考えられるので、オンライン授業の実施方法を工夫し、より肯定的な評価になるように改善する必要があると考えています。	「理解の助けになった方法」（設問19）については、7割の学生が演習を挙げています。これに伴い、3年生の図書館利用も幾分か進んでいます（設問20） これはオンライン授業になったことにより、課題や演習が増えた結果と考えられます。本来、授業は予習復習を含め単位が付与されます。教育の実質化の観点からもよい傾向と考えられます。今後、学生から評価を受けるオンラインコンテンツの質の向上に取り組んでいきます。 また、システム環境評価にコースによるバラツキがありますので、標準化を行いたいと考えております。	オンライン授業に関するアンケート調査について、教員内で共有し、授業改善に取り組んでいます。システム環境においては学生の声に対応し、コロナ感染防止を考慮した上で、確実に視聴できる講義室の確保にも努めています。
	3	学生には、大学で専門性を高めるとともに、視野を広げ、社会における多様な問題を解決する能力を養ってほしいと考えています。専門的な知識の向上に対する満足度は高く（設問44）評価できますが、昨年と同様に他分野の知識や交流が必ずしも十分ではないようです（設問46, 50, 51, 52, 60）	理工学部では1年次のSTEM概論のように分野を超えた科目を準備していますし、他コースの専門科目の履修を義務付けており、他分野の知識の獲得を促しています。アンケート結果はそれが十分ではないことを示していますが、専門科目とのバランスもあり、カリキュラム自体の改定は難しいかもしれません。しかしながら、SIH道場に対する評価は、1年生より3年生の評価の方が高くなっています。従って、幅広い知識と汎用的スキルの重要性は3年生には認識されており、これを1年生の時点でどれだけ学生にその重要性を植え付けるか改善したいと考えております。加えて、既存科目の内容を見直すなどして、少しでも学生の視野を広げられるように検討していきます。	引き続き、分野を超えた知識や交流が促せるように、STEM概論や他コース履修を適切に実施していきます。SIH道場に対する評価は、1年生より3年生の評価の方が高くなっていることより、上下間交流も視野に入れます。
産生物学資源	1	1年生の調査では、新型コロナウイルスの影響によりインターネットを利用して課題提出を期限内に提出している者が80%以上と大変多く（問22）、図書館の利用も限られたものであった（問20）。一方、授業時間外に、他の学生と一緒に勉強したり、課題を解決することが思った以上に多かった（70%以上）ことは学生同士が交流したかとの意思の表れと思われるが（問24）、対面ではなくオンライン授業が多かったため、授業自体をつまらなく感じる者が多かった（問28）ことは問題である。	(1) 新型コロナウイルスの感染が収束次第、オンライン授業から対面授業に切り替えることで、学生同士の意見交換や交流が促進されるように務める。 (2) 本を読むことは、教養や知識が身に付いて視野を広げるだけでなく、脳の活性化、ストレス解消など多くのメリットがあることから、積極的に図書館を利用して種々の本を読むことを勧める。そのため、BCPが上がった場合も図書館を閉館せず、入場人数の制限をかけるなどして学生に利用させる体制が必要である。 また、自宅のWifi環境が整っていない学生の学内でのオンライン授業受講場所としても、図書館が活用できることが望ましい。	本年度後期からはできるだけオンライン授業から対面授業に切り替え、学生と教員とだけでなく、学生同士の意見交換や交流ができるように務めた。 本年度前期は新型コロナウイルスの影響で図書館の開館時間は短縮されたため学生の皆さんにはご迷惑をおかけしたが、後期（正確には10月16日）からは通常の開館時間に戻っている。学生にはオンライン授業受講、予習復習や読書などで図書館を積極的に活用することを奨励している。
	2	分析力や問題解決能力、そして批判的に考える能力が大きく増えたと感じる者が少ない（問43, 45）。これからは、授業とその課題に追われ、深く考え他者と討論する時間が持てない様子が見てとれる。また、リーダーシップ、コミュニケーション、プレゼンテーションの能力が増えたと感じる学生が少なく（問47, 55, 56）ことは問題である。	(1) 講義・実習ではグループワークで課題を解決して発表するような参加体験型の学習機会を増やす。	本年度後期からはオンライン授業から対面授業に順次切り替え、各講義・実習においてできるだけ参加体験型の学習機会を増やすように取組んでいる。
	3	オンライン授業が多く、また、対面による教員との面接等を実施できなかったため、授業へ興味を失ったことや（問96）、実験室の設備や器具への満足度が低い（問106）ことは問題である。	(1) クラス担任教員による個人面接を定期的（年2〜3回）に行い、学生の要望や不満などをできるだけ把握し、学部全体で解決する体制作りを構築する。	新型コロナウイルスの影響を最も多く受けていると思われる1, 2年生に対しては従来の年2回（前期および後期開始時）の個人面談だけでなく、夏休み中の面談も実施し、学生の要望や不満などを把握した。
	4	新型コロナウイルスの影響により、学生が集まって行動する機会が激減し、学生同士の一体感が低いことや（問96）、実験室の設備や器具への満足度が低い（問106）ことは問題である。	(1) 本学部は専用棟が無いことや、常三島、石井、鳴門、新野の4つのキャンパスに実験室が分散しており、学内での学生の居所が小さく分散していることの影響が強いと思われる。それゆえ、常三島キャンパスプランを再検討し、学部のスペース配分や共通スペースの確保について策定することとなっている。	来年度以降（第4期中期目標）に学部のスペース配分や共通スペースの確保について策定されることになっており、現在、本学部のスペースが他学部並みになるように申し入れている。
教養教育院	1	教養教育への満足度について 「大学の教育内容・環境に対する満足度（問88）」では、教養教育に対する回答として、「とても満足」、「満足」と答えた割合の合計が、1年生で53%、3年生で52%だった（前はそれぞれ49%、50%）。今年度は新型コロナウイルス感染症対策で教養教育の授業の多くがオンラインで行われたが、学生の満足度でみれば昨年と大きな違いは見られなかった。今後とも学生が意義を感じるようなことができる授業を展開していくことが重要である。	(1) 令和3年度から、教養教育科目は8科目群から4科目群に再編され、各科目の履修要件もそれに合わせて改正された。新しい科目群・科目での学生の満足度をアンケート等で調査し、満足度の高い授業の実施を目指す。 (2) 令和2年度から、新型コロナウイルス感染症対策として教養教育科目ではオンライン授業が広く行われるようになった。その経験から学生・教員の双方がオンライン授業に習熟し、オンライン授業の利点・欠点が明らかになってきた。今後はコロナ禍の有無にかかわらず、より効果的なオンライン授業の実施を目指す。	最新版のアンケート結果では、教養教育の授業に対して「満足」と回答した学生は、1年生で59%、3年生で57%と昨年度と比較してやや上昇した。これは新型コロナウイルス感染症対策として行われているオンライン授業に、教員・学生の双方が慣れたためかもしれない。また、1年生では教養教育群を再編した効果が現れた可能性もある。今後は、さらに各学部のDPに合った教養教育の授業を提供する必要がある。 前期・後期の授業開前に、新型コロナウイルス感染症対策としてのオンライン授業の実施についての注意喚起を授業担当教員に行い、効果的なオンライン授業の実施に努めた。 また、徳島大学のBCPレベルの変更に伴い、授業実施方法の案内を行った。
	2	教養教育科目の授業選択について 授業の選択基準について、「好きな科目や面白そうな科目」は全体的に多いが、「単位をとりやすい授業」も多くの学生が選択している。1年生では「満足」と答えた割合の合計が、1年生で53%、3年生で52%だった（前はそれぞれ49%、50%）。今年度は新型コロナウイルス感染症対策で教養教育の授業の多くがオンラインで行われたが、学生の満足度でみれば昨年と大きな違いは見られなかった。今後とも学生が意義を感じるようなことができる授業を展開していくことが重要である。	(1) 適正な授業選択のための授業の配置を検討することを目的に、教員FD「学生のつもりになって授業選択してみよう」を各学部・学科と共同で開催している。学生と同じ条件でシラバスを参考に作成し、時間割作成過程で構造的、履修要件の問題点などを検討するFDである。これまでに未実施及び最近履修要件の改正を行った学部等との開催を優先し、定期的に変更する。 (2) 適正な授業選択のための授業の学生への提示について、シラバスの記載漏れのチェックを毎年行っている。新型コロナウイルス感染症対策等のため授業形態、評価方法の変更があった場合は、速やかにシラバスの変更と学生への周知を行うようにする。遠隔授業の一部または全てに取り入れる場合は、実施方法について可能な限り詳細な情報を提供する。	教員FD「学生のつもりになって授業選択してみよう」については、最近履修要件の改正を行った薬学部及び医学部医学科とそれぞれ共同で令和3年度末までに開催する予定である。 また、成績のクラス間格差が生じていることも「単位の取りやすさ」と関連していると考え、クラス間格差を是正するために、クラス間格差の生じている授業科目の担当教員へのインタビューを行い、問題点の抽出、共有を行った。 適正な授業選択のための授業の学生への提示について、シラバスの記載漏れのチェックを前期・後期で行った。新型コロナウイルス感染症対策が求められる状況が続いているため、授業形態、評価方法の変更があった場合は、速やかにシラバスの変更と学生への周知をmanabaや教務システムなどを用いて行うように周知した。
	3	高大接続について 高等学校から大学の学びへの橋渡しとして、「入学前学習—高校復習—リメディアル科目」という一連の学修の流れが確立した。 高校で未履修の数学・理科について、1年生と3年生の約1割の学生が「必要性を感じたが何もしていない」と回答した。	(1) 令和3年度の入学前学習は、それまでの「物理学、化学、生物学、英語、情報」に加え「数学、レポートの書き方」を加えて入学前学習を充実させた。また令和3年度からリメディアル科目の「高大接続科目」と「自然科学入門」を一体化し「高大接続科目」とすることで、学生に対しリメディアル科目をわかりやすくした。令和4年度は、各学部に入学前学習を照会する際に、各教科の概要や学習時間の目安等を示し、各学部の入試区分ごとに指定科目を選択できるようにする予定である。	令和3年度は入学前学習として、「数学」と「レポートの書き方」を新設した。アンケート結果から、「数学」と「レポートの書き方」は入学前学習として高い評価を得た。 令和4年度は、各学部に入学前学習を照会する際に、各教科の概要や学習時間の目安等を示し、各学部の入試区分ごとに指定科目を選択できるようにした。その結果、学部・学科のニーズに合致した科目の受講が可能になった。 また令和4年度よりリメディアル科目に「英語」を新設し、英語の苦手な学生や語学マイレージ・プログラムに対応していく予定である。

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等	
4		(2) 高校復習テストで成績が不振な学生に対しては、リメディアル科目の履修を勧めるよう各学部の教務委員会へ連絡をしているが、卒業要件ではない学部からの受講生は多くない。リメディアル科目の履修を促すため、薬学部および生物資源産業学部では、リメディアル科目の単位を、令和3年度から教養科目群の「自然と技術」の単位へ振り替えることとした。	医学部医学科及び歯学部歯学科は、現在大学入学共通テストで選択しなかった理科学科目を、リメディアル科目の必修科目としている。令和3年度より、生物資源産業学部及び薬学部がリメディアル科目の単位を、教養科目群の「自然と技術」の単位へ振り替え可能とした。これにより、生物資源産業学部及び薬学部からのリメディアル科目の受講が、特に「生物学」で増加した。
	語学教育について 語学を習得するのに、高校までの英語の学習ののち、さらに必要な時間は1,000から2,000時間といわれている。教養教育での6単位の英語では270時間しか確保できず、専門教育における英語の学習をいれても不足するため、自学自習は必要不可欠である。しかし、教養教育、専門教育で行われる英語教育で十分という回答が最も多く（問76）、自学自習としての学習方法としてTOEICなどの参考書・問題集を定期的に勉強（問74）となっているため、自学自習をもっと積極的に働きかける必要がある。	(1) 徳島大学としては自学自習教材としてスーパー英語を用意している。この利用をさらに伸ばすために、HP等での更なる広報を予定している。 (2) 語学マイレージプログラムのひとつに語学教育センターが実施するプログラム（ELCSワークショップ）がある。この利用を増やすため、令和3年度後期からは昼休み、18時以降のプログラムを開くとともに、週末・長期休暇における集中プログラムを新設する。	これまで教養教育院のHPからはスーパー英語へのリンクを掲載するのみであった。HPに「スーパー英語の使い方」、「スーパー英語を使った英語学習」、「スーパー英語による語学マイレージポイントの取得」などの説明を加え、利用促進を図った。 教養教育院語学教育センターが実施するプログラム（ELCSワークショップ）の利用を増やすため、令和3年度後期は昼休みに2講座、18時以降に2講座、週末・長期休暇における集中プログラムとして6講座を新設した。